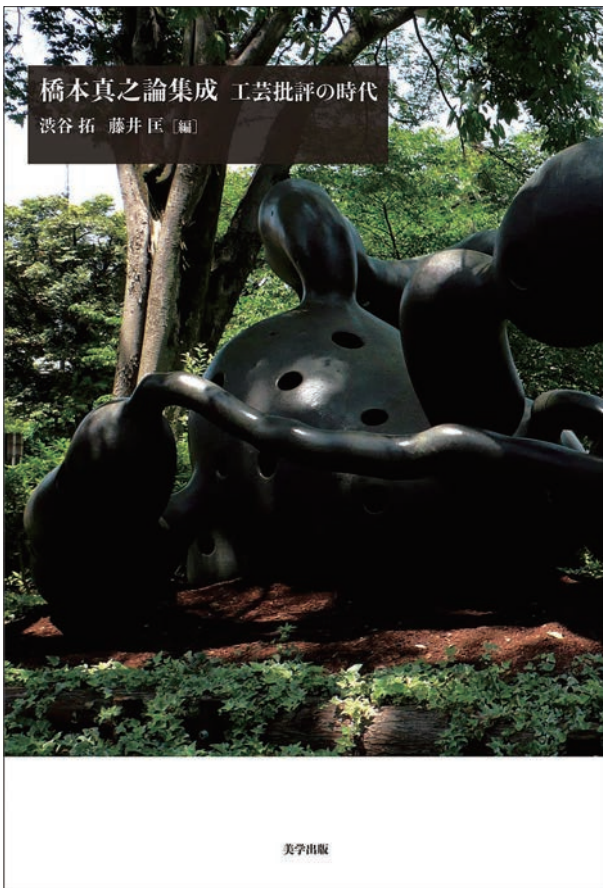


[制作記録]

『橋本真之論集成』の刊行に係る調査・編集

An Anthology of Criticism on the Art of Masayuki Hashimoto : Compilation Report

渋谷 拓
SHIBUYA Taku



【図版1】『橋本真之論集成—工芸批評の時代』表紙

1. 研究の目的と概要

本研究の目的は、現代の美術工芸における最も重要な美術家のひとりである橋本真之（1947～／本学名誉客員教授）を論じた評論集『橋本真之論集成』（以下『集成』とする）を刊行することである。

橋本真之はヒューマンスケールを超える鍛金造形

と強靱な内省に基づく珠玉の言葉を通じて、1980年代後半以降、「美術」と「工芸」の両分野に跨り、作家・批評家・研究者たちに刺激を与え続けてきた。橋本自身の文章は『造形的自己変革—素材・身体・造形思考』（美学出版、2016年）としてまとめられ、美術関係者の中で高く評価されている。他方、橋本の作品や造形思想を巡って批評家や学芸員、研究者らが紡いだテキストもまた、1980年代以降の本邦の美術シーンを理解する上で重要な資料となっている。様々な書き手があるひとりの美術家の営みについて記した批評のアンソロジーは、わが国ではあまり事例が見られず、近年の例としては『高松次郎を読む』（水声社、2016年）を挙げることができるくらいである。今日、橋本真之の営みに関する批評のアンソロジーを刊行することは、過去40年間の工芸批評における重要な一局面を明らかにする作業に等しいと言え、今後の美術工芸のあるべき姿を思い描くにあたり極めて大きな意義がある。また出版の暁には当該書籍を図書館に備え、本学学生・大学院生の利用に供するとすることで、研究制作のより一層の洗練・深化に大きく寄与すると考えられる。

本刊行物は、橋本とも旧知の間柄で近現代彫刻を専門とする研究者である藤井匡氏（元宇部市学芸員／現在、東京造形大学教授）との共同で編集することとした。なお、東京造形大学からは、当該書籍を刊行するための出版助成を受けた。

2. 研究事業の経過

本研究における主な作業は、(1)主に作家（橋本真

之) 提供の資料に基づく橋本真之もしくはその作品を論じた評論の収集・把握、(2)掲載テキストの検討とテキストデータ化(OCR作業)、(3)掲載テキストと章立ての決定および掲載写真の決定と確保、(4)原著者もしくは著作権継承者となる遺族、および初出の掲載媒体の発行元への転載許可依頼、(5)章立ておよび造本の仕様決定、(6)校正、(7)原著者、協力者/協力機関への献本、(8)橋本真之作品に関する調査、に大別される。

(1) 主に作家提供の資料に基づく橋本真之もしくはその作品を論じた評論の収集・把握

(2) 掲載テキストの検討とテキストデータ化

(2021年3月~2022年3月)

『集成』を刊行するというアイデアは、2020年秋に本学特別研究費で実施した「方法の発露2020-方法の無意識」(トークセッションおよび展覧会)の事業終了後に、藤井匡氏との会話のなかで芽生えたものである。主に彫刻研究の観点から橋本の制作に関心を寄せていた藤井と、本学の工芸教育における理論的側面の底上げを考えていた筆者は、橋本真之に関する評論集を刊行することで、「美術」と「工芸」の CATEGORY を巡る議論に改めて一石を投じることができると考え、『集成』の編集に合意した。その後、橋本が自著を出版している美学出版より刊行の同意を取り付けることができた。一般的に、美術家の個展などの機会に制作される図録等の編集において、出発点となる基礎資料は、当該作家自身が保管する展評や写真をはじめとする資料であることから、関東在住の藤井が橋本のアトリエに通って資料を整理し、最初のたたき台を作成、東京と金沢で藤井と渋谷がそれぞれ掲載テキストや書籍の構成について検討し、理解を深めていった。

(3) 掲載テキストと章立ての決定および掲載写真の決定と確保

(4) 原著者等および初出の掲載媒体の発行元への転載許可依頼

(2022年4月~7月)

掲載予定テキストの決定、および刊行について美学出版の了解取り付けを前年度までに済ませたことを前提に本学奨励研究費を申請しつつ、章立ての検討とテキストの原著者および初出媒体への転載許可願いの発送を同時に進めた。編者および橋本氏としては掲載希望があったにもかかわらず、著作権継承者(原著者が鬼籍に入っているため)が不明で転載許可を得られなかったテキストが残念ながら一件生じた。これについては、編者によるあとがきで言及することによって、後続の研究者に当該テキストにアクセスするための手がかりを提供することで対処した。図版として使用する写真については、橋本氏の協力を仰ぎ、作家自身が撮影した記録写真を使用することとし出版コストの削減に努めた。なお5月に東京で関係者による打ち合わせを対面で行った。

(5) 章立ておよび造本の仕様決定

(6) 校正

(2022年8月~2023年1月)

2022年の夏から秋にかけて、リモート形式で打ち合わせを重ね、転載許可の確保状況をにらみながら、章立てと掲載テキストの配分を決定するとともに、出版社の販売戦略とも擦り合わせを行いながら読者層や価格の観点から総頁数や判型について合意した。この過程で、橋本の展覧会歴一覧および文献一覧は刊行物には掲載せず、研究者等の便宜のために出版社のウェブサイトからダウンロードできるようにする、という決定に至った。判型は橋本氏の自著『造形的自己変革』と同様のものとした。12月に初校、編者による構成を経た再校を年末年始にかけて原著者もしくは著作権継承者に送付して校正依頼を行った。またカバーに使用する橋本作品の写真の選定を行った。2月初旬に校了し、同月末日付で『橋本真之論集成-工芸批評の時代』として発行された(図版1)。

(7) 原著者、協力者／協力機関への献本
(2023年3月)

刊行された書籍を原著者、調査協力者／協力機関、初出掲載誌編集部に発送した。

(8) 橋本真之作品に関する調査
(2022年11月)

テキストデータの入稿を進める一方で、編集過程で橋本作品の調査の必要が出てきていたため、山口県宇部市のときわ公園、および埼玉県狭山市立博物館設置の橋本作品を調査した(図版2、3)。これらの作品は、屋外環境で展示位置を恒久的に定めて設置された作例である。国立工芸館所蔵の代表作《果実の中の木もれ陽、木もれ陽の中の果実》(1975~1987)が、しばしば貸出等の事情により設置場所から移動する場合が出てくる(すなわち、作品と設置場所とが強い関係に置かれていない)のに対して、狭山や宇部の作品は樹木等の植生との位置関係が厳密に考慮され、樹木の成長と作品との経時的な相互作用までもが念頭に置かれている作品である。他方、これらの作品は、埼玉県立近代美術館や埼玉県上尾市のひかわ幼稚園設置の作品のように、屋外に恒久設置された作品が「増殖」した(設置後に作品が大きく成長・変容した)タイプの作品ではない、という点で、屋外に設置された橋本作品の独



【図版2】狭山市立博物館の橋本真之作品

特な一系列を形成している。そのため、これらの作品を実見し調査できたことは、『集成』を編集するにあたって前提となる橋本の仕事の全容の理解に大きく寄与するものとなった。



【図版3】山口県宇部市ときわ公園内に設置されている橋本真之作品

3. 研究事業の成果

上述の通り、『橋本真之論集成－工芸批評の時代』は、2023年2月末日に美学出版から刊行されるに至った。途中、若干のスケジュールの遅延があったものの、リカバリーしながら予定通りに編集を進めることができた。発行に関していえば、一部の掲載テキストの著者もしくは著作権継承者から、出版に高い意義を認める声があった。書評が出る、再版される、というようなわかりやすいかたちでの成果は現在のところ得られていないが、現在入手が困難になったテキストをも再録した本書は、「美術」と「工芸」というカテゴリーの正当性を巡る1980年代以降の本邦の議論を歴史的に俯瞰する際には大変便利な内容となっている。学生や研究者による本書の活用が進むことで当該の議論がさらに深まり、より創造的な研究制作が生まれる、というかたちで本書が寄与することを期待したい。

なお、編集に係る調査の過程で、さる橋本真之作品の所有者が作品の寄贈先を探している、との情報にたどり着き、橋本氏を介してのその後の交渉で、

当該の作品が本学に寄贈される予定となった。本学名誉客員教授であり、国立工芸館が作品を所蔵する重要作家の作品が美術大学である本学に収蔵される可能性が得られたことは大変喜ばしいことであり、これは本書の刊行計画がもたらした重要な「副産物」であるといえる。寄贈受け入れの経過は、追って何らかのかたちで発表することにした。

付記

本稿は、令和4年度教員奨励研究「『橋本真之論集成』の刊行に係る調査・編集」について報告するものである。

(しぶや・たく 一般教育等／博物館学)
(2023年11月8日 受理)